

(12) イシガメ (爬虫類カメ目イシガメ科)

① 分布

流域の全集落

② 主に見られた場所

川, 水路, 池, 田, 畑, 里山など

③ 採録した呼び名

- ・ 共通 カメ (全集落)
- ・ 標準和名 イシガメ
- ・ 幼体 イチリンガメ, イッスンガメ, イッセンガメ, コガメ, コノハガメ, ゼニガメ
- ・ 大型体 ドガメ, ドチガメ, ドンガメ
- ・ 体色 (青) アオガメ
- ・ その他 ドロガメ



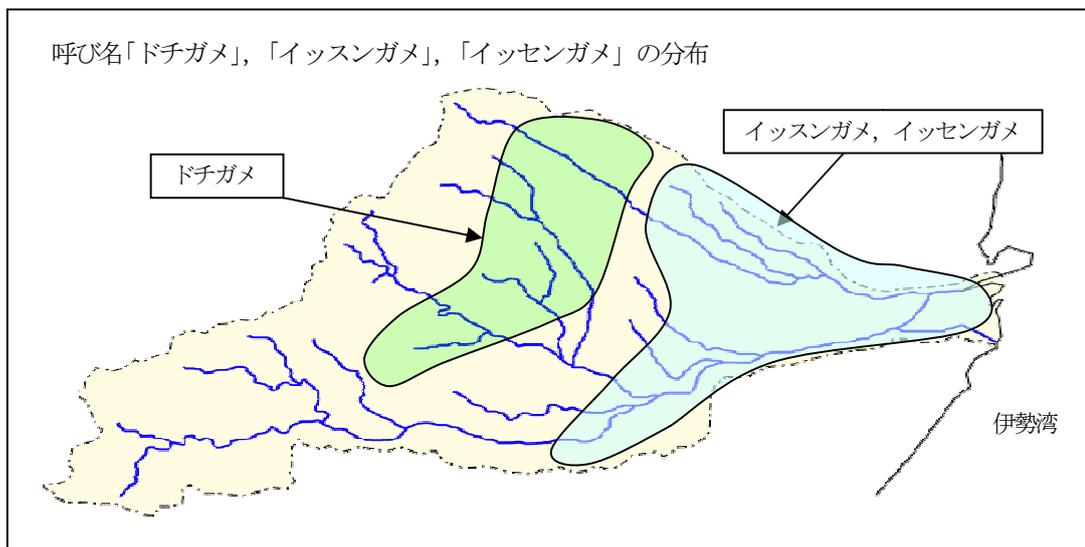
④ 分布と呼び名について

流域全体の川, 水路, 田, 池などの水域だけでなく, 産卵などのために畑や里山などでもよく見られたという。

呼び名としては, 一般的な「カメ」をはじめ, 幼体名, 大型体名など計13種を採録した。

全集落から採録した「カメ」のほか, 幼体名「ゼニガメ」と大型体名「ドンガメ」も多くの集落から採録され, 流域で一般的な呼び名であったと見られる。その他, 幼体名である「イッセンガメ」や「イッスンガメ」を中下流域で採録するとともに, 安楽川, 御幣川及び内部川上流域においては, 大型体が「ドチガメ」と呼ばれていた集落が多く見られた。

なお, 採録した呼び名には, 調査対象としなかったクサガメ固有のものも含まれている可能性がある。



⑤ その他

調査では, 何十年と同じカメが同じ所に産卵に来るという話や, 秋になると柿の木の下へ落ちた柿を食べに来るという話が聞かれた。

また, 「大きな亀には酒を飲ませ」という集落や, 「亀はママシやヘビを食べる」と言って大切にしていたという集落が見られた。

(12) -2 スッポン (爬虫類カメ目スッポン科)

① 分布

中下流域を中心として上流域の集落まで

② 主に見られた場所

川, 水路, 池など

③ 採録した呼び名

- ・ 標準和名 スッポン
- ・ その他 シリヌキ, ドチ, ドッチ, ドッチュウ, ドッチン, ドンチ



④ 分布と呼び名について

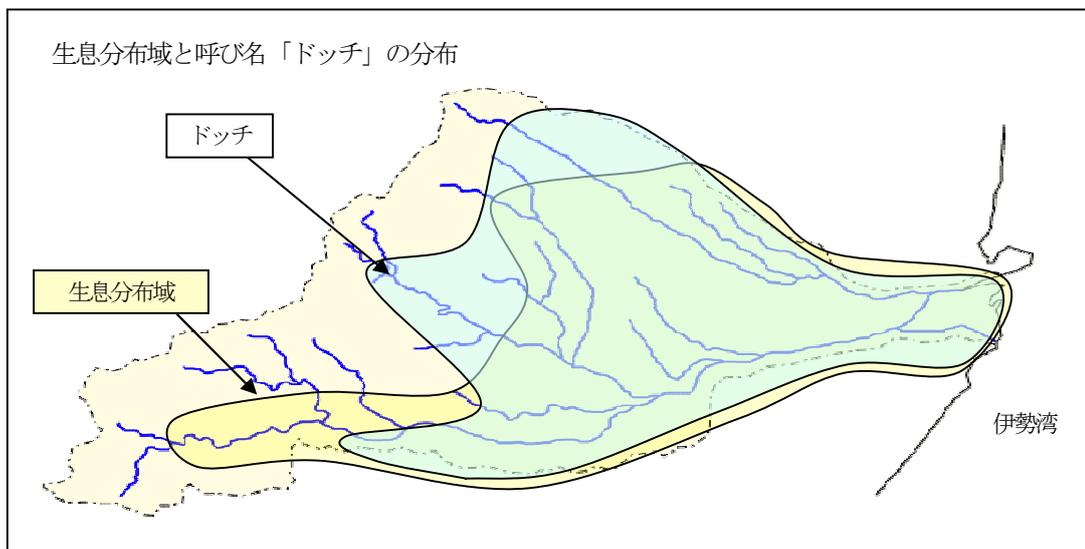
主として中下流域の川, 水路や池などで見られたというが, 生息数は多くなかったためか, 人目に触れることは少なかったようである。

呼び名としては, 標準和名である「スッポン」をはじめ計7種を採録した。

今日一般的である「スッポン」をほぼ流域全体で採録したほか, ほとんど目にすることがなかったと見られる上流域の集落を除き, 流域の広い範囲で「ドッチ」が採録された。また, 一部の集落では「ドチ」(特に上流域でこのように短く呼ばれた傾向にある), 「ドッチン」又は「ドンチ」とも呼ばれた。

聴き取りの中では, 1935年当時, 日常生活において「スッポン」と呼ぶことはなかったという集落もあり, 当時の鈴鹿川流域では, 一部の地域を除き, 本種は主として「ドッチ」と呼ばれていたものと見られる。

なお, 当時から戦後にかけて標準和名である「スッポン」が一般化し, 次第に「ドッチ」は使われなくなったと見られる。



⑤ その他

実際にスッポンを見かけることは少なかったようであるが, 当時の深くて危険な川や池で遊ぶ子ども達に対して, 「長いことそんな所で遊んでいるとドッチに尻を抜かれるぞ」などと注意を喚起する言葉としてよく使われていたようで, 中下流域を中心とした多くの集落で聞かれた。

(13) サンショウウオ類 (両生類サンショウウオ目サンショウウオ科)

① 分布

最上流域の中心として中下流域までの集落

② 主に見られた場所

山林の谷あい部分や川、湧水地など

③ 採録した呼び名

- ・ 一般 サンショウウオ
- ・ その他 サンショウボ
- ・ アカハライモリとの混称 イモリ



(三重自然誌の会撮影)

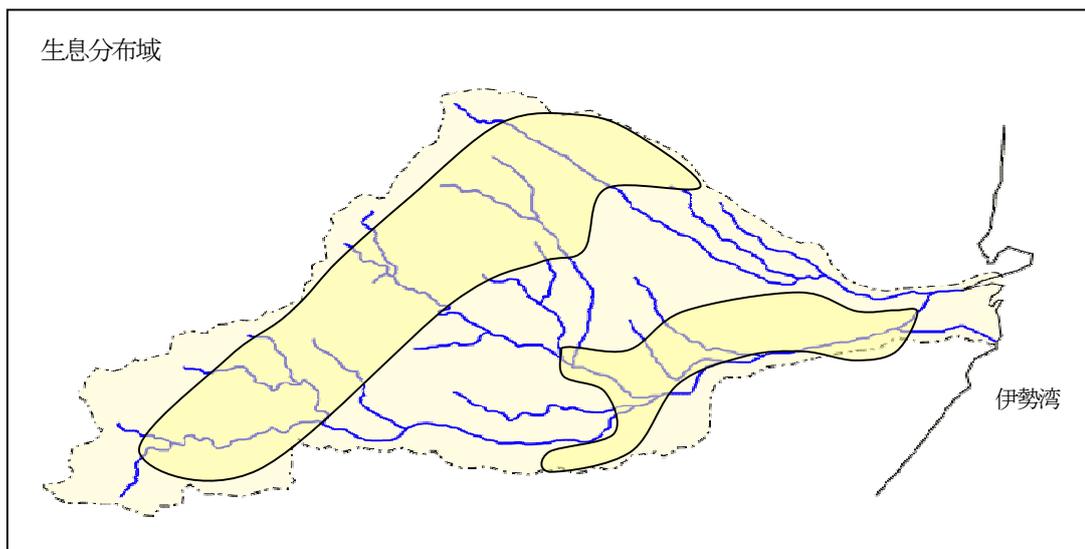
④ 分布と呼び名について

最上流域の山の谷川などでは数多く見られたほか、中下流域においては、山林の谷あいや湧水地などで見られたというが、生息数は多くなかったようである。

呼び名としては、「サンショウウオ」、「サンショウボ」、及び「イモリ」の3種を採録した。

最上流域ではほぼ全集落において、当時から「サンショウウオ」という呼び名があったようで、聴き取りからは、体形や大きさ、体色から単一種のものではなく、複数の種類のサンショウウオが生息していたことが伺われた。

中下流域においては、一部の集落で「サンショウウオ」という呼び名が採録された一方、「腹の白いイモリ」や「腹の黒いイモリ」といった話も聞かれ、サンショウウオではなく「変わったイモリ」という認識が一般的であったようである。



⑤ その他

サンショウウオの生息について直接問うのではなく、「腹の赤くない変わったイモリ」などと、イモリの変種の有無について問う等、聴き取り方法を工夫すれば、より多くの集落から生息情報を採録できた可能性がある。

また、聴き取りの中では、中下流域において現在の本種の生息情報は特に得られなかったことから、戦後の流域における沿川開発や湧水の減少等に伴う冷水環境の消失、水質の悪化等により、かつて中下流域に生息していたサンショウウオ類は現在では絶滅したものと見られる。

なお、本種を病気に効く薬として、「生きたまま飲み込んだ」、「焼いて干して煎じて飲んだ」といった話をいくつかの集落で採録した。

(13) -2 オオサンショウウオ (両生類サンショウウオ目オオサンショウウオ科)

① 分布

鈴鹿川, 加太川, 安楽川, 及び御幣川沿いの集落

② 主に見られた場所

川, 湧水の水路

③ 採録した呼び名

- ・ サンショウウオ

④ 分布と呼び名について

鈴鹿川本流, 加太川, 安楽川, 御幣川及び周辺の湧水の水路などでの生息情報を採録するとともに, とりわけ, 中流域で大型個体が見られたという。

呼び名としては, 「サンショウウオ」を採録した。

⑤ 本種と聞き取り調査について

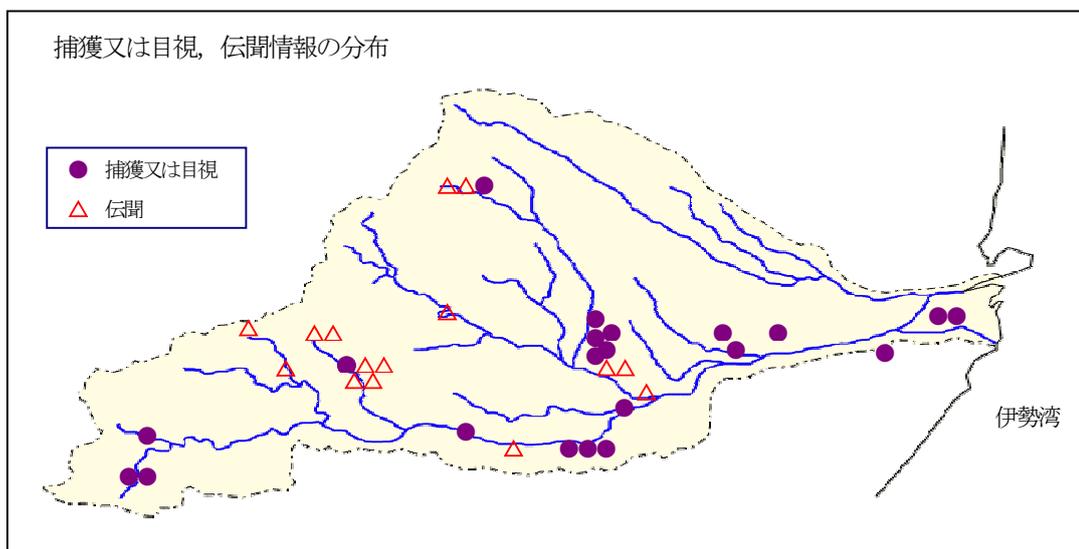
鈴鹿川でのオオサンショウウオの記録は近年の2件(清水・松月(1995))のみで, 鈴鹿川はその生息地とはされていない。そのため, 当初, 本調査の対象としていなかったが, 聞き取りを進めていく中で, 大型個体を含め, 数件のオオサンショウウオと見られる話を採録したため, 途中から調査対象に加え, 聞き取りを行った。調査では, 山林関係者にも補足的に聞き取りを行い, 捕獲・目撃事例に加え, 伝聞事例についても採録し, 別途「オオサンショウウオ調査票」としてまとめた(→6(4) オオサンショウウオ調査票)。

聞き取りの結果, オオサンショウウオと見られる話を計37件採録した。その内訳は, 捕獲又は目視によるもの22件, 伝聞によるものを15件である(同一個体と見られるものは1件として整理)。このうち, 過去に捕獲された大型個体の2件については, 当時の新聞記事や周辺地域の話題となったようで, 多くの人から同様な話が聞かれた。

聞き取りでは主たる調査対象者を70歳代後半から80歳代の高齢者としたことから, 採録した情報は1925年(昭和時代の始め)頃から1955年(昭和30年)頃にかけてのものが多く, また一部の大型個体を除き属人的な傾向が強い。こうした, 本種についての情報は時代の流れの中で, 今まさに消失しようとしているものと考えられる。



(三重自然誌の会撮影)



⑤ その他

幕末において, オランダ人シーボルトは1826年3月に現在の関町坂下でオオサンショウウオを地元の者から手に入れ(「江戸参府紀行」), 後にオランダに持ち帰り, ヨーロッパの学会で発表している。それが世界で紹介されたオオサンショウウオの第1号個体であるが, 手に入れた場所のすぐ近くを流れる鈴鹿川でその生息記録がほとんどないことも原因し, その捕獲地は未だ謎とされている。

(13) -3 アカハライモリ (両生類サンショウウオ目イモリ科)

① 分布

最下流域を除く集落



② 主に見られた場所

川、水路、池、みず田、湧水地など

③ 採録した呼び名

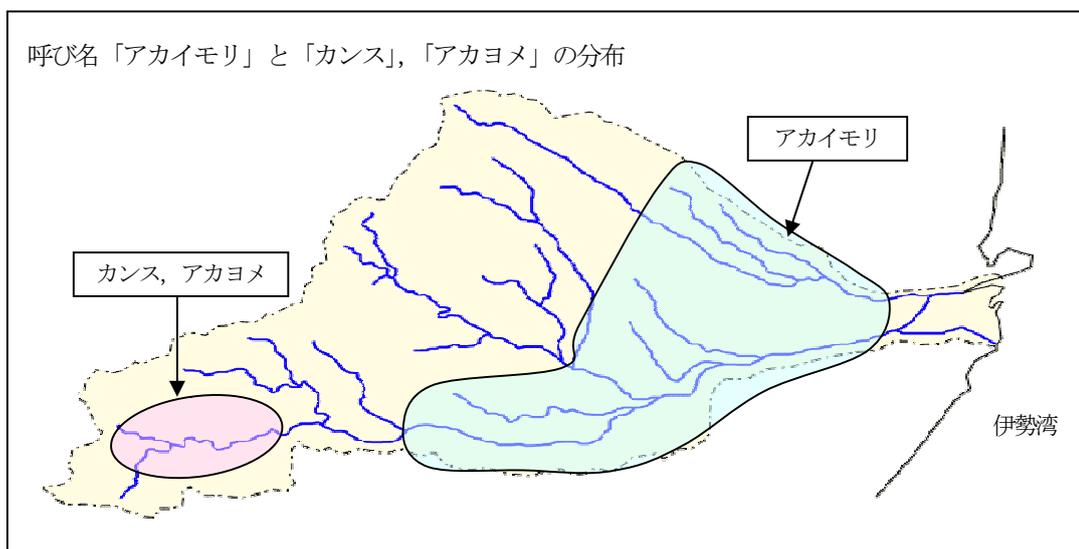
- ・ 共通 イモリ
- ・ 体色 (赤) アカイモリ, アカハラ, アカフン, アカフンドシ, アカペー, アカペーコ, アカヨメ, アカヨメサン, ハラアカトカゲ
- ・ その他 カンス
- ・ 他種との混称 トカゲ, ヤモリ

④ 分布と呼び名について

上中流域を中心として最下流域を除き、ほぼ流域全域で見られたようである。生息場所については、上流域では水域であればほぼどこでも見られたようであるが、下流域では湧水地などに限られる傾向にあることが伺われた。

呼び名としては、一般的な呼び名である「イモリ」をはじめ、腹が赤いことから名付けられた「アカイモリ」、「アカハラ」など計13種を採録した。

ほぼ流域全域で「イモリ」を採録したほか、中下流域の広い範囲で「アカイモリ」とも呼ぶ集落が見られた。一方、加太地区では「イモリ」のほか、「カンス」、「アカヨメ」、「アカペーコ」など多様な呼び名を採録した。とりわけ、「アカヨメ」については峠を挟んだ伊賀市柘植地区においても同様に呼ばれていたことから、両地域の交流関係が伺われる。



⑤ その他

本種は、かつて最下流域を除く全域に分布していたものと見られるが、湧水の消失等により、現在では、上流域以外で見かけることは珍しい状況にある。

なお、鈴鹿川沿いに中流域から下流域にかけてのいくつかの集落において、腹の白いイモリや黒いイモリがいたという話を採録したが、それらはサンショウウオ類として整理した。

その他、聞き取りの中で、中流域の集落において「イモリの黒焼きほれぐすり」という言葉を採録した。

※ 「みず田」とは、湧水などにより一年中、水が絶えない水田をいう。